

端末7.9インチの「マイ先生」

机の上には、タブレット端末が4台。山梨英和高校2年の小宮山遊さん(17)は「円グラフを入れた方が分かりやすいかな」と画面を指して操作しながら、友人に問いかけた。粘着の特性を

あしたのくらし

新技術×山梨

第2部 変わりゆく学びや

調べる課題研究。発表資料を共同で制作できるアプリを操作すると、友人3人のタブレット端末の画面が同時に変わり、小宮山さんが編集している画面が表示された。友人が「グラフを作れるアプ

1 学校で、家で…生徒を導く



友人たちとタブレット端末を使って研究の資料をまとめる小宮山遊さん(中央左)。情報通信技術を活用した教育が日常となりつつある(中中央)。情報通信技術を活用した教育が日常となりつつある
—甲府・山梨英和高校

リを探してみる」と感じ、検索学習を遊んでくれる。その間にほかの生徒は資料に載せる実験中の画像を編集。7・9の「マイ先生」が、山梨英和高校は2012年度から県内でいち早く、情報通信技術

12年度から導入

術(ICT)を活用した授業を展開してきた。きっかけは11年、オーストラリアの学校と結んだ姉妹校提携。姉妹校は生徒が1人1台タブレット端末を持って授業で活用することが決まっていた。ICT教育が世界標準になる。その考えを学校全体で共有し、同じ法人が運営する中学校から導入が始まった。

校内のどこからでもインターネットに接続できる環境を整備。生徒がタブレット端末を通じていつでも自主的に学べるように、学習教材もデジタル化した。

AI活用始まる

ICTの先にある人工知能(AI)も、教育現場に導入されつつある。総務省は16年版情報通信白書で、AIを活用した数学の教材を紹介。AIが生徒の解答時間の長さや正答率から、本人の苦手分野を判断して、不得意な問題を繰り返し出題する。1人の教員が複数の生徒に教える授業とは異なり、一人の理解度に寄り添った指導が可能になる。そんなが電卓に、電卓がコンピュータに変わったように、やがてはAIも当たり前の技術になる可能性がある。

「辞書を引かなくても簡単に意味が分かるなんて、自分のためになるのかな。小宮山さんは母親から、その声を掛けられたことがある。小学生のころ、国語辞典のページを手繰り、自由研究の資料を探しに図書館を

英語の担当教員は生徒がつまづきやすい文法をアニメーションで解説した教材を作成。導入から5年がたち、生徒が使いがやすい学習アプリを互いに教え合う。生徒も教員もICTの活用になじんでいる。

小宮山さんの学びに、タブレット端末やスマートフォンは不可欠だ。通学する電車内では、英語の意味を選択式で答えるスマホの教材を使う。問題はランダムで出題され、ゲーム感覚で単語を覚えることができる。家に帰っても、まずかばんから取り出すのはタブレット端末。習熟度に合わせた課題が担当教員から端末に配信されることもある。

最新技術は、学びのかたちも大きく変えようとしている。生徒の視線の先にあるのは、黒板ではなくタブレット端末。翻訳機能は教員と外国籍の子とのコミュニケーションを円滑にし、インターネットの普及は限界集落でも都市部と同等の教育を可能にした。一方、AIは試験で入

歩いたのを感じ出す。学ぶつて、何だろう。さまざまな単語や記号、数式が浮かぶタブレット端末。電源ボタンを押すと、すつと画面が消えた。